芽吹く。それぞれに吹く春の風を受けて

Cradle

出羽庄内地域文化情報誌［クレードル］

春号
vol.86
2025 Spring

特集

庄内の風に耳を澄ませば

ご自由に
お持ちください
TAKE FREE

Cradle｜春号
出羽庄内地域文化情報誌［クレードル］
令和7年4月1日発行
2025 Spring vol.86

発行／Cradle事務局　山形県鶴岡市山王町8－15［株式会社 出羽庄内地域デザイン］電話0235(64)0888
制作／Cradle編集部　山形県酒田市宮田2－59－3［コマツ・コーポレーション］電話0234(41)0012

FIDEA GROUP

酒田市／最上川さくら回廊

穏やかに春を運ぶ 最上川さくら回廊

荘内銀行

庄内への手紙
［4通目］

遠ざかる庄内

歴史学者
石川 禎浩

2012年3月に定期運行を終えた寝台特急「日本海」

高校卒業後に庄内を離れ、以来京都で暮らすこと40余年、近ごろ望郷の念がいや増すのは、歳のせいばかりでなく、庄内がずいぶんと遠くなってしまったからかもしれない。空港のおかげで行きやすくなった東京とは対照的に、京都や大阪は、乗り換えなしには行けないところになってしまった。こう書くと、若い人は怪訝に思うだろう、「京都ってダイレクトで行けたんですか？」行けたのだ。40年前なら鶴岡・酒田―京都は乗り換えなし、夜行を含め1日4往復の列車が北陸経由で関西と庄内を結んでいたのである。寝台は特急「日本海」が2便と急行「きたぐに」、そして昼間の特急「白鳥」、8時間以上かかったが、乗ってしまえばあとは着くのを待つだけだった。

三川町のわたしの実家は浄土真宗の門徒で、京都の東本願寺には、村の篤信者たちが団体で参詣していたが、その際に父祖が使ったのがそうした列車だった。乗りっぱなしで8時間は確かに長いが、気楽な団体旅行だから退屈するはずもない。京都はかなり身近な場所だったのである。わたしにとっても、帰省のたびに長い時間を過ごす車内は、読書と何回かの居眠りを経て、少しすました京都暮らしの自分ともとの自然な自分が切り替わる楽屋のような場所だった。

だが、いつしか時は流れ、列車には空席が目立つようになり、やがて2012年までにすべて定期運行を終了、この間庄内空港に就航していた大阪直行便もその3年前に廃止されていた。ここに直行のすべは失われたのである。もちろん今、所要時間だけなら、京都・庄内間は前よりかなり短く、その気とお金さえあれば、京都の家から最短5時間半ほどで庄内に着くことができる。空路で伊丹―羽田―庄内と乗り継ぐのである。だが、そのためには駅、空港で、少なくとも4回の乗り換えが待っている。大きな荷物を抱えて移動する手間や待ち時間を考えれば、それが短縮分に見合うかどうか。

今、実家には老母が1人残る。東本願寺参りをかねて上洛を勧めても、飛行機はどうも不安があると、なかなか乗ってくれない。ならば鉄道ということになるわけで、切符を用意して何度か来てもらっている。ただし、このごろはその経路も悩ましい。強風に伴う運行見合わせの多い「いなほ」を使うか。山形新幹線を使い、新庄経由で来てもらったこともあったが、その陸羽西線も工事に伴うバス代行輸送が3年を超えそうで、線路は草が伸び放題。

あぁ、我がふるさとよ、もうこれ以上遠くに行かないでおくれ。

いしかわ・よしひろ ｜ 歴史学者

三川町出身、1963年生まれ。京都大学文学部卒業、同大大学院修士課程修了。文学博士。現在は京都大学人文科学研究所教授、同現代中国研究センター長。研究分野は中国近現代史、特に中国共産党史。著書に『中国共産党成立史』（岩波書店、2001年）、『革命とナショナリズム 1925−1945 中国近現代史③』（岩波新書、2010年）、『赤い星は如何にして昇ったか――知られざる毛沢東の初期イメージ』（臨川書店、2016年）など。近著『中国共産党、その百年』（筑摩書房、2021年）で、第33回アジア・太平洋賞特別賞、第25回司馬遼太郎賞を受賞。

特集

庄内の風に耳を澄ませば

異なる文化や価値観、感性をどんなふうに受け止めているのかな、
海外から日本に移住した方たちにお会いしたら聞いてみたいと思っていました。
その国、その地域の人にとっては当たり前の日常の中から
本質や深層を直観的に感じ取っているのだろうな、と。
庄内に吹く風、この風土に耳を澄ませ、全身で受け止めながら
それぞれのライフステージを進む皆さんと
“庄内の好きな場所”に出かけてお話を聞きました。

協力＝出羽三山神社、酒田市美術館、山王くらぶ、鶴岡市加茂地区自治振興会

特集
庄内の風に
耳を澄ませば

ミヨ・サラ・ラッシェルさん

フランス出身。トゥールーズ大学日本学科在学中に早稲田大学に1年間留学。トゥールーズ大学大学院を経てJETプログラムの国際交流員として鶴岡市観光物産課に着任。2020年より一般社団法人DEGAM鶴岡ツーリズムビューローに在籍。地元男性と結婚し、二児の母。ARGODIA会員。

Sara Millot

at 羽黒山

羽黒山はサラさんが仕事でもプライベートでもよく訪れる地。ピンク色の服を着ているのは、東北のアドベンチャートラベルに関わる通訳ガイドがエリアごとにカラーを持っているため。サラさんのガイド名は「ピンク・レディ」。

「日本らしい日本」を求め、7年前、鶴岡に来たミヨ・サラ・ラッシェルさん。出羽三山との出合いがその後の人生を大きく変え、現在は出羽三山の世界遺産登録を目指し、インバウンド事業に専従しています。

「出羽三山を世界遺産にすることが私の夢です。実現するまであきらめません」。そう笑顔で話すサラさんが初めて羽黒山を訪れたのは2017年。JETプログラムの国際交流員として鶴岡市観光物産課に配属され、地域の観光資源をリサーチしていた時でした。

「杉並木に佇む羽黒山五重塔の美しさに圧倒され、石段を登って最後にご褒美のように現れる三神合祭殿に驚いて。それまでの日本旅行の中で一番感動した体験でした。なぜこんなに素晴らしい場所が外国人に知られていないのかと、一気に任務にやる気が出ました」。

以来サラさんは出羽三山を軸にした観光情報提供や観光企画を立案しながら、民俗学者・戸川安章（とがわあんしょう）さんなど専門家による出羽三山関連の文献を数多く読み、また神職や住職、山伏、そして山形大学名誉教授の岩鼻道明さんとの交流を重ね、出羽三山信仰や歴史についての造詣を深めます。2020年に一般社団法人DEGAM鶴岡ツーリズムビューローに転職してからも、インバウンド向け旅行商品の開発などに邁進してきました。

「日本の精神文化にふれる観光地としては京都や熊野古道などが有名ですが、神仏習合や神仏分離の歴史をこれほど色濃く残す山は他にありません。即身仏を一番多く安置しているのも出羽三山です。

歴史は難しいけれど、学んだことを外国の観光客に伝えながら案内すると、日本の精神性の奥深さを感じて皆さんとても感動してくれます。三神合祭殿でのご祈祷後に涙を流す方も少なくありません。その姿を見るたびに『出羽三山を世界遺産に』という自分の夢は、間違いないと実感しています」。

昨年7月、2年にわたる出産育児休暇を経て仕事に復帰。9月にはパナマシティで開催されたアドベンチャートラベルワールドサミットに参加しました。それを受けて現在は広域連携での観光振興を目指し、東北を周遊して最後に出羽三山を巡るツアーの開発と企画販売に力を注いでいます。「鶴岡はインバウンドの面でいうと、通訳ガイドが少なく、交通の便が悪いといった課題がありますが、そこはセルフガイドツアー用アプリを開発したり、ガイド向けに六十里越街道をGPSに載せたりして対応しています。世界遺産登録に向けた動きも始まっていますし、このまま皆さんと夢に向かって頑張っていきたいですね」。

13歳で美空ひばりの歌に出合って日本文化が好きになり、「日本らしい日本」を求めて地方都市の鶴岡に来たサラさん。出羽三山に魅せられ、学び、夢に向けて突き進むその姿は、私たちのふるさとへの誇りも醸成してくれているようです。

ガイドツアーとして即身仏を安置する本明寺へ。

パナマシティでのアドベンチャートラベルワールドサミットにて。

特集
庄内の風に
耳を澄ませば

キム・ビンナさん

韓国出身。高校卒業後、東京の日本語学校や九州大学に留学しながら日本文化を学ぶ。ソウルの韓国外国語大学校国際地域大学院修了後、国費留学生として東京藝術大学大学院入学。2023年8月に藝大派遣研究員として酒田に移住し、24年4月から4年任期で市職員として活動している。

Kim Binna

at 酒田市美術館

酒田市美術館はキムさんのお気に入りの場所。光が差し込むガラス張りの回廊やガラス越しに見える景色が、ヨーロッパ旅行の際に訪れたデンマークのルイジアナ近代美術館を思わせるそう。

韓国出身のキム・ビンナ（金 嬪娜）さんは、東京藝術大学大学院在学中にアートプロジェクトを研究しました。その縁で2023年に酒田市に拠点を移し、市民参画型の新たな動きを進めています。

アーティストが地域に滞在し、住民と交流しながら創作活動をする「アーティスト・イン・レジデンス」。今春この取り組みを酒田市が東京藝術大学と連携し、初開催しました。中心になって企画・催行しているのが、市企画部文化政策課のキム・ビンナさんです。

日本語が話せる祖父母や小説家である父親の影響で、日本文学に親しむ10代を過ごしたキムさん。初めて日本に来たのは東京の日本語学校に留学した18歳の時でした。その数年後に九州大学に1年間留学し、日本文化を研究。帰国後ソウルにある大学院でも日本学を学びました。「この時に初めて現代アートに触れて刺激を受けました。日本のアートプロジェクトについても興味を持ち、両親から3度目の留学を勧められた時に、日本でアートプロジェクトに関する研究をすることにしました」。

2013年、東京藝大大学院入学。熊倉純子教授の指導のもと、足立区「音まち千住の縁」のアートプロジェクト「イミグレーション・ミュージアム・東京」の企画を担当し、2019年に博士号を取得します。その後韓国に戻りますが、2023年2月、熊倉教授から突然、酒田市派遣の話を勧められました。「もともと酒田市と藝大は、岸洋子さんや市原多朗さんが同大出身で、土門拳記念館※館長の佐藤時啓さんが藝大の教授をされているなどの縁があります。また2018年に発足した酒田市文化芸術審議会では、自治体文化政策研究家の中川幾郎会長と親交がある熊倉先生も、委員として協議を重ねてきました。その経緯の中で酒田市が藝大との連携を求めるに至ったそうです」。

2023年6月、酒田市と東京藝大が「『アート人財』と『文化・芸術的資源』の活用による人づくり、まちづくりに関する連携・協力協定」を締結。同年8月、キムさんは、市民コーディネーターの発掘・育成を目指して調査研究を実施する藝大派遣研究者として来酒しました。「酒田の皆さんからは風が強くて雪も降るから大変ですよと言われましたが（笑）」。昨年4月からは市の職員として任務にあたっています。「アートプロジェクトは地域が抱える課題に対し、新たな価値観でアプローチする方法でもあり、地域に変化が起きるまでには時間がかかります。4年間の任期でどこまでできるかわかりませんが、今回のようなイベントを重ねて、酒田にとって最良な道を見つけていきたいですね」。目指すのは、アートの可能性に気づき、これまでとは違う方法や考え方を恐れず試みる市民が現れ、彼らによる自発的な活動が芽生える姿、と語るキムさん。異国の地での活躍を応援しています。

※4月から「土門拳写真美術館」に改称

「アーティスト・イン・レジデンスさかた」の企画②「酒田散漫さんぽ」。招聘アーティストは藝大出身の佐藤悠さん。

「アーティスト・イン・レジデンスさかた」の企画①「編む手 解く手」。招聘アーティストは藝大出身の和氣光凛さんと田中ジョン直人さん。

特集
庄内の風に
耳を澄ませば

ガンバリーニ・ピエールさん

フランス出身。青年会議所（JCI）での活動を機に酒田との縁が生まれ、2018年に鎌倉出身の奥様の杏子さんと共に移住。ボードゲームカフェ&バー「シェ・ピエール」をオープン。JCI酒田では理事や常任理事を務めた。国際交流サロンの企画運営のほか、通訳・観光ガイドとして市の事業に幅広く貢献。

Gambarini Pierre

at 山王くらぶ

湊町酒田を象徴する建造物の一つ、山王くらぶの喫茶室にて。JCI時代に「酒田・遊佐魅力発信委員会」の委員長を務め、酒田の湊町文化や商人文化のすばらしさに触れたといいます。

酒田市中通りの「シェ・ピエール（ピエールの家）」は地元民が集い、海外旅行客や移住者がよりどころとする まちの観光案内所や交流拠点の役割を果たしています。

「私は酒田の商人町の歴史が大好きです。商人の文化が外から来た人を受け入れてきたんじゃないかなって。酒田の青年会議所（以下JCI）で一緒だった仲間が、卒業後に酒田まつりの実行委員長になりました。彼は移住者ですが、歴史と伝統のあるイベントを任された。酒田は外から来た人にもオープンな場所だと思ったエピソードの一つです」。そう話すのは、酒田の中通り商店街のボードゲームカフェ&バー「シェ・ピエール」のオーナー、ピエールさんです。ピエールさんは南フランスの町マントンで生まれ、コートダジュール地方の主要都市ニースで育ちました。カンフー映画が好きなお兄さんの影響でアジアの文化が好きになり、学生時代は映画製作を学び、一時はタイで暮らしていたといいます。その後ニースで起業したのを機にJCIニースに入会。海外留学中だった杏子さんと出会い、結婚したことで日本との距離が一気に縮まり、2012年に生活の拠点を東京に移しました。

その後、JCIグラースを立ち上げ副理事長となったピエールさんは、2014年のアジア太平洋地域会議山形大会に参加。そこで酒田のメンバーと交流を深めます。「同じ年に酒田で開かれた東北青年フォーラムでは、ゲストなのにスタッフTシャツを着せられました（笑）。でもそれがうれしかった。他の土地で活動や生活をする時は、Belong（所属する）という気持ちが大切なんですよね」。

その後、酒田の会社から通訳や翻訳などの仕事を請け負うようになったピエールさんは、東京と酒田を行き来する生活を2年ほど続けます。「その頃杏子とよく話していたのが、このまま東京に住み続けるのかということ。いつか子どもが生まれたら別のところで育てたい、高い生活費のために仕事をするような暮らしはやめようって。スローライフを送るために私は酒田に行きたいと思いました」。

2018年に酒田に移住したピエールさんはJCI酒田に入会。2021年度には副理事長を務めました。5年前に趣味が高じて始めたお店にはさまざまな人が集い、コミュニティが育つ場に。「人の生活にアクションを生む、お店はそのためにあるんだと今は思っています」。ピエールさんと杏子さんは北庄内地域通訳案内士としてクルーズ船や観光で訪れた外国客のガイドを務めるほか、まちづくりや国際交流などの分野で多岐にわたる活躍ぶりです。「人と人とがつながることで自分の場所をつくることができる。それは日本、酒田に来て知ったことです」。

酒田の中通り商店街にある「シェ・ピエール」には1700種類以上のボードゲームが。看板猫のドミノが迎えてくれます。

「酒田のまちづくりにコミットしながら、近い将来にはボードゲームのミュージアムを開くのが夢」とピエールさん。

語学を目的に日本を訪れたクリスさんは、英会話講師として在日歴30年、5年前から庄内に移住して言葉というコミュニケーションの豊かさを伝えています。

日本でワーキング・ホリデー制度が始まったのは1980年。最初の相手国オーストラリアから、クリスさんは21歳の時に初めて日本を訪れました。

ラトビア出身のお父様とイギリス出身のお母様のもとに生まれ、お父様の再婚後はユーゴスラヴィア出身のお継母様と過ごしてきたクリスさん。「10代の頃、テレビのドキュメンタリー番組を見て、西洋とはまったく違う文化があるアジアに興味を持ちました。特に日本はすごく神秘的に見えましたね。母国語がそれぞれ違う家族の影響で、コミュニケーションには言語が大事だと知っていたので、私も他の国の言葉を勉強してその国を深く知ってみたいなって。日本に行って日本語を学ぶことが、私の夢になりました」。

念願の来日が叶った後は、大阪で英会話講師としてキャリアを積みながら日本語の勉強に励み、やがて永住権を獲得。30年ほどを大阪で暮らしてきました。その間、仲間と始めたクリケットクラブを通じて奥様の瑞穂さんと出会い、結婚。「日本はすばらしい国だから、大阪だけで終わるのはもったいない、いつか地方に住もうって瑞穂と話していたんです。瑞穂の祖父母の家がある鶴岡には何度か来ていて、ある時、湯野浜から海岸沿いを車で走って加茂の港を見た瞬間、『おとぎ話みたいな港町がある！』と感激したことを覚えています。数年後にそこに住むとは思わずにね」。

都会にはない暮らしがしたい、そう考えて移住先をさまざま考えた末に鶴岡行きを決め、運良く加茂に物件が見つかって、あの時に見た港町で新生活を始めました。当初は大阪と庄内のコミュニケーションスタイルの違いから戸惑いもあったそうですが、地元の人が「加茂には悪い人はいないよ」と言ってくれたことや、小中学生が元気に挨拶してくれることに安心感を覚えたといいます。昨年からは加茂コミセンで英会話教室を開くなど、地域との接点も増えている様子です。「加茂にはずっと住むつもりです。大好きな場所」と話すクリスさんの次なる夢は、英会話を学ぶホームステイの受け入れや旅のコンシェルジュとして、田舎暮らしの良さを伝えること。「私が日本語を勉強したのは、この国の言葉でこの国の人たちとコミュニケーションしたかったからです。母国語ではない言語を身につけるのは難しいけれど、知りたいし話したい。今も毎日辞書を見て、新しい単語や新しい表現に出会います。それが楽しい。私にとって語学はエンドレスです」。

クリスさんの英会話教室はマンツーマンが基本。ご自身の語学経験を生かして、一人一人に合わせた勉強法を実践。

昨年は加茂コミセンで英会話講座を開講。国際交流プロジェクトin加茂も始動し、さまざまな企画が実施される予定。

クリストファー・ケイさん

オーストラリア、シドニー出身。1989年に来日、以来30年ほどを大阪で暮らす。5年前に奥様の瑞穂さんの実家がある庄内に移住。加茂在住。英会話講師としてのキャリアは長く、オンライン・対面で地域内外に生徒を持つ。スイデンテラスにパートタイマーとして勤務し、施設管理を担当。

Christopher Kaye

at 荒埼灯台

加茂の海が大好きと話すクリスさん。シドニー郊外の自然豊かなところで育ち、日本でも都会にはない暮らしを求めて移住を決断。「海や山や雲が季節ごとに変わるのを楽しんでいます」。